

シリーズ - 食と農 -

第3回「フルーツ王国やまなし」を支える生産者

今回は「フルーツ王国やまなし」を代表する果物、桃とぶどうを生産されている山梨県笛吹市の渡邊昂さんにお話をうかがいます。渡邊さんは山梨化工産業株式会社（現：株式会社アセラ）を退職された後、ご実家を継いで桃とぶどうの生産をされています。日本曹達の各種製品の圃場試験にも度々ご協力いただいている関係で、今回改めて桃とぶどうの栽培などのお話をうかがいました（写真1）。

日本曹達（以下：日）：よろしくお願いたします。まず、渡邊さんが農業を始められたきっかけというのは、ご実家を引き継ぐ形だったそうですね。

渡邊氏（以下：渡）：はい、もともとは山梨化工産業（現：株式会社アセラ）に入社していましたが、父親のほうが高齢で、もうちょっと俺たちにはやりきれないんで後を頼む、というようなことで、丁度50歳、平成7年に早期退職して跡を継ぎました。

日：跡を継がれて、それ以来ずっとやられてるんですね。

渡：当時からこの場所で桃、ぶどうを栽培しています。

最初は隣接町村の一宮町に桃の先駆者がいて、従兄

弟が「桃いいぞ、やれよ」というようなことで始めたのが桃栽培です。

日：いつ頃のことでしょうか。

渡：昭和26年か27年ぐらいです。

日：御坂町ではかなり早かったのではないですか。

渡：御坂では一番早いぐらいじゃないかな。

日：当時からぶどうも栽培されていたのでしょうか。

渡：その当時はまだ養蚕が多くて、それで養蚕も厳しい状況になって随時やめられて、代わりに桃が普及してきました。ぶどうを始めたのはその後ですね。



写真1. 渡邊氏ご夫妻（左：渡邊 昂氏）



写真2. 渡邊氏桃園



写真3. 渡邊氏桃園

ぶどうはあの当時「デラウェア」が主体で、ジベレリン処理が当時、昭和40何年かな、始まったところでした。

この地域はデラウェアが主体で、あと甲州種も栽培していました。「巨峰」とかそういうのが出てきたのはずっともう10年も15年も後です。

ぶどうの栽培は昭和32～33年頃から始めましたが当時はほとんど親父任せで、土曜、日曜の仕事が休みのときに薬剤散布を手伝うくらいでした。

日：今は桃とぶどうを栽培されていますが、桃は何品種ぐらい栽培されていますか。

渡：今は10品種ぐらいですね。6月の中旬から9月上旬までの間、労力配分を考えながら早生種や晩生種など分けてやってるんだけどね。でもやっぱ



写真4. 収穫間際の桃

り花の時期などは作業が重なり大変です(写真2、3、4)。

日：年間の作業としてどのようなものがあるのでしょうか。

渡：実際に稼働するのは3月の中旬から始まって、桃に限って言うと9月の5日頃までかな。その間は雨が降ってもカッパ着て作業をしなきゃならんというような流れですね。桃が終わった頃からぶどうの収穫が始まってきます。

ぶどうは栽培を始めた当時の品種とだいぶ変わって、今は醸造、ワイン用の「甲州」「ベリーA」、あとは皆さんご存じの「シャインマスカット」がメインになってきています。この地域は立地条件がよく、シャインがかなり早く出荷できる地域で、8月のうちから出せる状況です。(ほかの地域が出荷する)9月の半ばというところではシャインそのものが終わってしまいます(写真5、6、7)。

日：作業はご家族でされているのでしょうか。

渡：はい。主に妻と二人で、あとは随時随時で姉と妹に摘果作業とか、あるいは袋掛け作業とか手助けしてもらっていますね。

日：どのくらいの面積を栽培されているのでしょうか



写真5. 甲州



写真6. ベリーA



写真7. シャインマスカット

か。

渡：桃が8反ちょっと、ぶどうが2反ちょっとかな。昔は半々で、4反、4反ぐらいでやりました（写真8）。

日：ぶどうの栽培を縮小したというのは、作業の面なのか、それとも桃のほうが収益が良かったからなのでしょうか。

渡：桃のほうが良かったということですね。もともと栽培していたデラウェアが何十年経ってきてだんだん安くなり、桃のほうがずっと価格が安定してきたってということもあるね。それで桃の品種もいろいろ、早生種、中生種、晩生種といろいろな品種が出てきて、その点で労力配分がある程度できるということで、ぶどうを縮小して桃メインになってきています。

日：先ほど10品種と言われましたが、栽培を始めた頃はどの品種がメインだったのでしょうか。

渡：桃の栽培を始めたのは昭和26～27年ですが、あの当時の品種は「岡山早生」や「箕島白桃」、「小林白桃」などでした。その後、「神玉」や「大久保」などを栽培していました。大久保というのは当時缶詰などに使われた経過がありますね。半分に割ったりすると種が簡単にぼろっと取れちゃう。この当時の品種は今ではほとんど栽培されていないけどね。今のメインは早生種、中生種までは白鳳系です。そ



写真8. 桃園場

れで中生から晩生種に栽培されているのが白桃系ですね。

日：有名な「あかつき」や「川中島白桃」などの品種はどこに入るのでしょうか。

渡：「あかつき」はどちらかというと中生種です。「川中島白桃」は8月入ってからの収穫だから晩生種になります。早生種というと、「ちよひめ」、「はなよめ」それと「日川」、そして「赤宝（せきほう）」、「みさか白鳳」までですね。

中生種は「あかつき」「白鳳」になります。晩生種になると最近流行りの「さくら」とかいろいろあります。県で推奨してるのは中生種の「夢みずき」とか「夢しずく」っていう品種になりますね。

日：私たちからすると、桃は桃なので品種まで区別がつかないことが多いですね。

渡：最近は少し品種が増えすぎて、農協でも市場でも品種名が混乱してしまうので統一してほしいという流れがあって、出荷体制としては同じ系統の名前で統一、例えば白鳳系なら「白鳳」として出荷している場合もあります。

日：なるほど。渡邊さんのところだけでも10品種作られてて、他の方も同じような時期に出荷されたり、農家さんごとに別の品種作られてたりして、それが同じような時期に農協さんに一気に集まってしまうと大変ですからね。

渡：価格的には、早生種は出荷時期が早くて珍しいということでまあまあな価格、中生種は量がでるので少しダウンして晩生種では糖度が高く味がよいので価格が盛り返すというような価格体制ですね。晩生種は糖度アップされた品種が多いです。

日：晩生種の栽培は増えていますよね。

渡：「川中島白桃」というのが今一番作りやすい品種ですね。面積的にも増えつつあると思います。有袋でやってる方が多いけど無袋でも栽培できますしね。

栽培という、桃は15年以上、20年ぐらい経つと果皮に肌荒れを起こして商品価値を落としてしまうことがあるので、無理をしても袋掛けをして栽培を続けることもあります。果皮に1ミリ前後の亀裂が入るような肌荒れ現象が起こるんですが、実はそのほうが糖度は高いんです。

日：なぜ15年から20年ぐらいで商品価値が落ちてくるのでしょうか。

渡：通常なら葉が繁茂して実は葉の影になっているのですが、老木になってくると葉の生育がひと回り小さくなって空が見えるようになるんです。そうすると実が直射日光を受けて日焼けを起こす、割れる。そういう現象が出てくるから、平均的にも18年、20年ぐらいで改植してるんじゃないかな。

日：今日は畑を見学させていただきましたが、だいぶ改植をされていたようでした。

渡：今は県で推奨してる「夢みずき」を植えています。この品種は早生品種ですが、糖度もいいし色もあるし、昔の品種と違って甘さが全然違うんです。だから今、若木は全部夢みずきです。

日：桃の栽培で特に気を遣っていることは何でしょうか。

渡：土を柔らかくというのが基本的にあって、元々この地域は土壌がいいんですが、農協の指導でできるだけ有機質多めにとすることで、有機たい肥を散布しています。化学肥料も農協の指導を受けて配合とか量とかこだわっていますね。あとはときどき生育中に特殊な葉面散布剤を使うぐらいでしょうか。

あと、今は草生栽培が多いんです。100パーセント近いかな。だからシーズン中は草刈りが大変です。とは言っても今は機械を運転するだけで刈れるけど。僕がまだ中学校の頃はよく畑に行かされて手で刈ってました。本当に農機の進化は大きいですね。

収穫に使うリフトだって、20年前まではみんな脚立でやってました。だから今、農家では草刈り機、リフト、SS（スピードスプレイヤー）、この三つはもう常時備えておかなきゃならない。

日：SS無くして防除なんて想像できません。この面積を特にお二人メインでやられてるとなると。

渡：大変ですよ。昔は手押し消防ポンプみたいな小型の散布機で散布していましたからね。当時、1町歩近くをやって、薬剤散布するのも手散布でやってたときは2日かかり。今はもう1町歩ぐらいだったら、3時間から4時間程度、半日で終わりますね。

日：ところで、日本曹達との付き合いというのは、渡邊さんが当時の山梨化工におられた頃からののでしょうか。

渡：昭和39年に入社して41年から当時の農薬課に入りました。そこで営業ということでスタートして昭和42年頃から日曹の担当者さんと営業で一緒に同行したり、農協回ったりなんてことをして。僕はその当時は富士五湖地区を南都留、北都留、丹波山、小菅を担当するというので営業をやっていましたが、それから何十年かお付き合いをさせてもらって、結果的には私も会社辞めてからも縁が切れないような状態になりまして、いろいろお世話になった経過があります。

日：渡邊さんの圃場ではぶどう、桃含めて毎年いろいろと当社の薬剤の試験をさせていただいて大変お世話になっていますが、病害虫防除に関してはどのようなものが問題になっているのでしょうか。

渡：虫害だと単純にアブラムシ、シンクイムシとかハダニ、そのくらいでしょうか。少し前に問題になっていたのはモモハモグリガですが、各社いろいろ研究されて薬剤が出ているので、ここ数年はあまり問題となっていません。

薬の効果が高いのか、一時期は大変な騒ぎだったコナカイガラムシ、クワシロカイガラムシにしてもうちの園に限っては見えません。最近の剤も本当に効果の安定した薬剤が出てるし、新しい剤も次々と出てきているから、定期散布していれば特に問題となる害虫はないかなと思います。

病害だと、数年前の台風でこの地域ではせん孔細菌病が問題になりましたが、メーカーさんや農協等の指導が良くて、農家も徹底した防除を2年、3年

続けてきたので発生密度が低下して、今ではほとんど発生しない園もあるくらい薬剤の効果は出ています。ただし、油断をして手を抜くと再発する可能性があると思うので、このまま1年でも2年でも長く定期防除を徹底していけば問題ないと思いますね。

灰星病の発生もないし、病害で特別困ってるというのはないですね。だからあくまでも発生させないようにどう薬剤を使っていくのかというところだと思います。これを徹底してやっていけば、今ある剤でも十分補えるんじゃないかなと思います。

日：今は年間何回ぐらいの防除をしていますか。

渡：桃で8回くらい、ぶどうはちょっと少なくて5、6回でしょうか。

ぶどうに限って言うと、昔から使われている石灰硫黄合剤は汚れとかあるので1年置きか、あるいはほとんど使わないです。桃ではせん孔細菌病が発生してから銅水和剤を使っていますがムッシュボルドーにしてもICボルドーにしても徹底して散布しているので石灰硫黄合剤はほとんど使わないです。

あとは散布するときにはできるだけ薬剤を混合して一度散布するというのを目標にやっています。人によっては単剤で2、3日ごとに薬剤散布している人もいると思いますが、いくら1回3時間ぐらいで終わるとはいえ大変です。

散布については農薬の営業をしていた関係でよく話を聞くんだけど、何度散布しても効かんという人がいて、そういう場合は1反あたり200リットルくらいで樹の大きさに対して量が少ない。これじゃあ効かないってよく話をします。僕は最低でも400から500リットル散布しています。

日：最近の害虫としては、他県ではさくらや桃、梅などでクビアカツヤカミキリが問題となっています。関東だと群馬、栃木辺りのさくらでは問題になっています。

渡：このあたりでは聞かないですね。ここの近辺は昔、桃ではコスカシバがすごく問題になっていただけ、ここ数年ほとんど騒がない。発生がないね。

日：収穫物の出荷とか流通についてはどのようになっているのでしょうか。

渡：桃の出荷については、大体6月の15日頃から平均かな。早生種は「ちよひめ」という品種から始まります、出荷体制はそれぞれで違いますが、この地区は高齢者が多いのでほとんど農協任せの方が多いです。一部若手の方は直接出荷されてる方もいますね。あとは通販とか個人商社へ販売してる場合もあります。

日：農協以外の出荷はジュース用ですか。

渡：生食ですよ。ジュース用は専門にやってる会社があるのでそういうところに出荷しています。生食用で出荷できない規格はジュース用で出荷していますね。

日：ぶどうはどのような出荷体制なのでしょう。

渡：ぶどうもこの地域では7割、8割が農協です。一部個人商社がやっている場合もあります。

私はワイン用のぶどうを栽培していますが、これも農協直営のワイン会社へ出荷しています。あと甲



写真9. ワイン

州とベリー A は一部、個人消費用に委託用専門の醸造会社に持ち込んで作ってもらっています（写真9）。

7割がたワイン用として農協出荷、個人消費の委託用で3割ぐらいですね。今年もベリー A が2本の樹で1トン取れるうちの750キロくらいを農協出荷して委託250キロですね。

日：農協傘下の醸造場なんですね、「ニュー山梨ワイン」。言われてみれば、箱に農協さんの名前が入ってますね。

最後になりますが今後の目標などお聞かせください。

渡：今後の目標といっても、年も年だしここを変えよう、ここをこうしようという考えはあまりなくて、労力的にもやれる範囲が限られてきているので何とかやっていければ。今あるものをどう保護していくかっていうところですね。

日：でも品種の更新なんかはまだやられていますよね。

渡：体がもたないので、できるだけ幅広く植えて、全体の密度を低下させていくようにしています。品

種的にはどれをメインとかっていうのではなく、早生、中生、晩生種まで労力配分が平均的になるように考えています。栽培したいという欲はあるんだけど、体がついていきません。

でもこの県はいくらか新規就労者が町外から来たりしていて、たまたま私が農業委員をしていたからだけど、そういう方の相談には乗っています。つい最近も共働きのご夫婦だけど果物が好きで桃の栽培を始めたいとか、埼玉県からも20代の若手とか。休耕地が年々増えてるんですが、ここ近年はそういったところを借りて、耕作を始めたというところもありますね。

自分自身の目標としたら85歳まで。

日：それまでにお役に立てる農業をわれわれがどれだけ供給できるか。

渡：農業に限らず、労力を減らしてくれるようなものがいろいろと出てくるから、農家もやっていけます。助かってますよ。

日：そう言っていただけるものを出し続けるのが、われわれの使命でもあります。

本日はどうもありがとうございました。